

第505回 千葉医学会例会 整形外科例会

日時：昭和45年12月7日（日）

会場：千葉大学附属病院屋階大講堂

1. 最近の興味ある非定型的脊椎カリエス手術症例の検討

○堀井文千代，寺島市郎（千葉市立），
松井宣夫（千大），林 道夫（千大大学院）

症例 I： 35才主婦。入院前9カ月頸部痛が発現し，次第に上下肢の疼痛，知覚鈍麻，胸部掬扼感が出現した。入院後も手指巧緻運動の稚拙，拇指，小指球筋萎縮など急速な症状の増悪を認めた。レ線的に C₅₋₆，C₆₋₇ 椎間腔の狭小化および C₆，C₇ 椎体破壊像を認め，骨破壊の椎弓切除術を施行し，術後症状の著明な改善を見た。1カ月後頸椎前方侵入による病巣廓清術を施行したが，C₇ を中心に冷膿瘍が存在し，多量の膿汁排出を見，その結核菌培養は陽性であり，頸椎前方固定を同時に行なった。症例 II： 4才男。1年前より下肢痛，腰痛臀部硬結が発現し某医で穿刺したところ，膿汁を認め結核菌培養が陽性であった。エタンブトール，KM 使用で瘻孔は閉鎖するも糞便になお膿汁が附着した。入院時白血球増多，トリプレー反応陽性であり，レ線的に仙骨部に円形骨破壊像を見，経腹膜的病巣廓清術および前方固定術を施行した。両症例共術後経過良好であった。化学療法と並行し積極的病巣廓清術施行例だが若干の考察を加え報告した。

2. 治療困難なりし骨折の4例

○岡崎壯之，富田 裕，伊藤達雄，
中村謙介，土川秀紀（金沢病院）

近年，交通事故の激増につれて，全身状態あるいは局所状態の悪い難治な骨折が増え，そのうち，今年経験した4例の治療経過を報告する。2例は頭部外傷，血気胸ショックなどの合併した多重損傷で，また高年令でもあり，仮関節は覚悟の上でも全身状態の改善をはかった後に根本的な手術を施行。2例は血管損傷の合併があり，ただちに手術を施行した。最近このような症例が増加してき，単なる整形外科だけでなく，胸部外科，血管外科など，いわゆる救急医学にも普段より修練し，緊急に手術を要する場合と，全身管理後手術を施行する場合とを

慎重にかつ積極的に考慮しなければならないと思う。

3. 多発性胸椎々間板ヘルニアの一例

○陳 義龍，辻 陽雄，村田忠雄，
黒岩璋光（千大）

1931年 Antoni の臨床例が文献上嚆矢とされて以来，胸部椎間板ヘルニアについて幾多の報告があった。椎間板の後方脱出は腰部部や頸椎部における発生頻度に比して，胸椎部に生じるものはきわめてまれである。われわれは D₁₀₋₁₁，₁₁₋₁₂，L₁₋₂ 椎間に発生した多発性胸腰椎々間板ヘルニアを経験したのでここに報告する。

患者は45才，男子，会社員。主訴は両下肢シビレ感と脱力感。入院時，両下肢筋萎縮著明，麻痺性歩行を呈し，触覚鈍麻があった。臨床診断に基づき，D_{9-L₂} 両側椎弓切除を行ない，椎間板ヘルニアを確認し摘出した。術後経過良好である。文献的に本邦6例，外国112例の胸部椎間板ヘルニアの報告があり，これらのうち，記載確かな60例につき，年齢，発生部位，臨床症状，髄液所見，レ線所見，myelogram および単発，多発性などにつき，考察を加えた。

4. 下肢静脈瘤の治験例

○曾原道和，久米通生，高田典彦，宮坂 齊，
塩沢 博（君津中央），川野元茂（君津中央・外科）

われわれは最近下肢に発生した静脈瘤に対して手術的療法を行ない，きわめて良好なる成績をおさめた。静脈瘤は，中心静脈に異常がないものと，中心静脈に異常のあるもので，一次性静脈瘤と二次性静脈瘤に分けられる。この鑑別には perthes 試験，trendelenburg 試験および静脈撮影が必要である。治療には保存的療法と手術的療法がある。手術的療法としては，静脈埋没結紮とstripping があるが，われわれは全例，5例7肢に対して，stripping を行なった。stripping の適応となるのは，一次性静脈瘤である。術後弾力包帯を巻き，下肢を高位に保てば，術後合併症である血栓性静脈炎，術後血腫の予防に有効である。適応さえよければ，stripping